ティが国家によって古代に求められたという事実である。昨年の早稲田大学史学会では、近代史学の成立を共同討議したが、それをふまえつつ、近代歴史学が古代を発見し、創造していく過程を多面的に議論し、引き続き共有すべき論点をさらに掘りさげてみたい。

報告

古代オリエント史と旧約聖書

―エジプト学を中心として―

考古学専修　近藤二郎

西洋古代史が、ギリシア史以前に古代オリエント史を位置付けている経緯について考える。西洋世界におけるオリエント世界の捉え方の変遷を概観する。また、古代オリエント史と旧約聖書との関係についても説明を加えていく。

先ず西洋世界における「エジプト」認識の変遷を歴史的に捉え、今日のエジプト学がどのようにして形成されていったのかを考察する。さらに、古代オリエント史と旧約聖書の関係をエジプト学の歴史を通して位置付ける。

ギリシア以前の地中海世界とエジプトとの関係は、先史時代にまで溯ることができる。キクラデス諸島産の金剛砂が、紀元前四〇〇〇紀後半にエジプトにもたらされている。また、東デルタのテル・アル＝ダバア遺跡の紀元前一六世紀の層から「牛跳び」のフレスコ画の断片が出土しており、当時のクレタ島との密接な関係が想起される。

その他、新王国時代のエジプトへの朝貢図やエジプト出土のミケーネ土器、「海の民」の活動等が存在していた。

こうした歴史的出来事を題材として成立したホメロスの叙事詩で描かれている世界では、エジプトは常に神秘の国として登場している。

旧約聖書のモーセ五書の中で、創世記、出エジプト記の二書に、さらに列王記、歴代誌、エレミヤ書、ナホム書等にエジプトに関する記述が登場しており、イスラエルとエジプトとの関係の深さを表している。

古典古代の作品に現れるエジプトも重要な資料である。紀元前七世紀に、ギリシア人が初めてエジプトを訪れて以来、古典古代の作家により多くの作品が書かれた。それらの作品に描かれた「古代エジプト」は末期王朝（第二六王朝）時代からビザンツ時代までのエジプト史の最終段階にある芸術・宗教・社会・技術・数学・天文学・建築等であり、これらの情報も当然のことながら作家たちのバイアスのかかったギリシア・ローマ文化のフィルターを通して見たものである。代表作品としては、ヘロドトスの『歴史』、マネトの『エジプト史』、ディオドロス・シクルスの『歴史叢書』、ストラボンの『地理書』そして、プルタルコスの『対比列伝』等が知られる。

しかしながら、六四一年にアラブ遠征軍がエジプトを征服すると、エジプトはビザンツ世界や地中海世界から隔絶した存在と

なっていく。その結果として、西洋世界の旅行者がイスラーム世界に組込まれた古代エジプトの遺跡を訪問することは、ほとんど不可能なものとなった。西欧キリスト教世界とイスラーム教世界との対立の構図が明瞭なものとなり、エジプト史は、完全に西洋世界から忘れ去られた存在となる。

その一方で、イスラーム世界では、古代オリエントやヘレニズム時代における科学技術関係の著作のアラビア語への翻訳が積極的に行われ、ヘレニズム文化の継承保持者となっていく。

一一世紀末に開始された十字軍運動が契機となり、西洋世界では『旧約聖書』に描かれた「聖地」に対して特別の関心が持たれた。またイタリアでは一四世紀から一六世紀にかけ古代地中海文明の再評価と文芸復興を柱とするルネサンス運動が開花したのである。その結果、旧約聖書および古典古代の作品の再評価や聖地への旅行者による聖地情報がもたらされた。

長い間、西洋世界から忘れ去られていたヘロドトスやディオドロス・シクルス、ストラボン、プルタルコス等の古典古代作家の著作の多くのギリシア語写本がイタリアにもたらされた。十字軍活動の結果として起こった宗教改革により、聖書の翻訳が盛んに行われた。特に一四世紀以降、ヨーロッパでは各国語による聖書完訳が本格化していく。一八世紀までに多くの各国語訳の聖書が出版され、一般大衆への啓蒙を促していく契機となった。プロテスタンティズムが強い国々で旧約学が発達している背景は、こうした歴史的経緯によるものと思われる。

古代エジプトのオベリスクの実に一三本がローマ市にある。世界で一番オベリスクが存在している場所である。我々はこれらのオベリスクが、古代ローマ時代から立ち続けていると錯覚している。ヴァチカンの一本を除き全てが長期にわたり、ローマの地下に埋没していたものである。それが、一六世紀以降、ローマ法王のもとで復興と再建が行われたのである。またヴァチカンのオベリスクも一六世紀にローマ法王の命でサンピエトロ広場に移送、一五八六年九月二六日には盛大な奉納式が実施された。

ナポレオンのエジプト遠征は、軍事的には失敗に終わったが、遠征軍に同行した学者や技師、画家等から成る総勢一六七名の学術調査団によりエジプト学の扉は開かれていく。遠征軍がデルタのラシード（ロゼッタ）で発見したロゼッタ・ストーンによりヒエログリフが解読され、エジプト学が成立するのである。

古代オリエント史が西洋世界に再発見され、西洋文明の系譜・起源として位置づけられていくのは、ルネサンス以降の近代のことであったのだ。我々は西洋近代社会がギリシア・ローマの古典古代社会から連続的に存在していると思っている。

西洋キリスト教世界とイスラーム教世界との対立により封印された古代オリエント史は、ルネサンスの文芸復興と宗教改革の運動の中で再発見され、新たに構築されてきたものなのである。